

〈翻訳〉

『齊如山回憶録』(一)

本 多 正 廣

はじめに

齊如山(1877-1962)は中国の戯曲、京劇の作家・研究者として有名であるが、近年、北京の市民生活に関する著作が次々と出版され風俗社会の研究者としても評価されている。しかし彼にはさらに、戯曲作家・風俗研究者になる以前の、清末・民国初期の青年期に北京およびフランスで「革命家」として活躍した時代があった。

本翻訳は、これまであまり言及されたことのなかった「革命家」として生きた齊如山についての研究の一環である。

齊如山は1877年河北省の高陽県に生まれ、1962年台湾の台北において85歳で没した。それは清朝、中華民国、中華人民共和国の三つの時代にかかる近代中国の激動の時代であった。彼は、中国が列強に侵略された時期から日清戦争、戊戌の政変、義和団の乱、その後の八ヶ国連合軍の北京入城を経て、1911年ついに辛亥革命によって清朝が倒れ、中華民国にかわり、その後、中華人民共和国ができる直前までの間を首都北京で生きた人物である。当時の状況は自伝の『齊如山隨筆』(1953)や『齊如山回憶録』(1955)にも詳しく記されている。

このうち『齊如山回憶録』前半部分の第一章から第四章は、「革命家」

に至るまでの斉如山の形成を最もよく記しており、次のような構成になっている。

- 第一章 家世，儿童时代，考试情形
- 第二章 学洋文时期
- 第三章 拳匪进京，洋兵进京，做生意时代
- 第四章 学警察，谈考试，往欧洲，助革命，看兵变，办俭学会

小稿（一）は、この第一章を翻訳したもので、斉如山が受けた幼少期の士大夫の家での教育と、彼が受験した清朝末期の科举試験の現状を記している。

第一章

1、家系

私はかつて自伝を書いた。中央文物供应社から出版された『斉如山随筆』のはじめの一篇である。友人たちはこれを読んで、みながほんとうに面白いと褒め、もう一度詳しく書いてもらいたいといった。なかでも当時の中央党部¹の張秘書長晓峰氏の、ことのほかの頼みで、やむを得ずもう一度書くことになった。詳しく書くとすれば、もとの文に幾つか付け加えるなら私の家系をすこし話さなければならない。なぜなら個人の家系は、その個人の学識、行動、思想などと、すべて大きな関係があるからある。ことわざの二つのことばについて言えば、：

1 中央党部 1824年に中国国民党第一次全国代表大会で決まった、中国国民党总章・五章の“最高党部”を1945年の六次全国代表大会で“中央党部”と呼ぶと改正。（彭克明『国民党政府政治制度史词典』2000 安徽出版社 p.3）

盐打那么咸, 醋打那么酸²?

この二つの言葉は粗野で卑俗ではあるが、まちがいなく実態である。わが一族は、明代の永楽二年(1403)に山西の洪洞県から移ってきた。山東、河南のふたつの省には、この時山西から移って行った者が多く、河北省はとりわけ多かった。みんなが言うのは大きな槐樹のもとから移って行ったと。清末に河北省の多くの将校が、再び山西に行って大きな槐の木の間をたずねて捜し出した。それは朽ち果てた廟であった。おそらく当時、民衆が移って行く時、皆ここにそろって集まってから各地へ出発したのであった。だから皆が口をそろえて大槐樹底下³と言った。民国になってから、多くの将校が寄進してこの廟をもう一度再建したことは、中国人には昔のことや、もとを忘れない気持ちが深いことをはっきりと示している。

当時、山西から河北省に移った民衆は、どうしてこの様に多かったのか? 元朝は河北省一帯で多くの人を殺し、そのあと都のまわりを取り囲んで守らせるために、河北省のいろいろな所に多くの蒙古人を住ませた。明代の初めに、徐達⁴と常遇春⁵は、一人は山東より北上し、もう一人が河南を北上して、河南や山東の多くの蒙古人を殺した。なぜなら河北に住む民は蒙古人がわりと多いので、殺された者はさらに多い、殺されなかった者もすべて蒙古一帯に追い出した。そして河北省は人がいなくなっ

2 盐打那么咸, 醋打那么酸。…恐らく「盐打哪么咸, 醋打哪么酸」の間違い。訳: 塩を振ったところは必ず塩辛くなるし、酢を振ったところは必ず酸っぱくなる。意味: 何事にも因果関係が必ずある。

3 大槐樹底下 乔新华「山西洪同大槐樹移民問題研究的回顧与思考」清华大学学报, 哲学社会科学版 2007年第3期(第22卷) p.30

4 徐達 (1332-1385) 明濠州人 朱元璋の一部隊の将であったが戦功により相国、大將軍となる、副將軍の常遇春と一緒に北伐に参加し元を滅ぼし、元的首都大都(現在の北京)を攻め落とした。(张协之, 沈起炜, 刘德重『中国历代人名大辞典』1999 上海古籍出版社 p.1927)

5 常遇春 (1330-1369) 元末明初怀远人 元軍から朱元璋に寝返り、自ら先鋒を願い出て敵地・采石を奪取する功を立て、徐達の副将として北伐に参戦し元の大都を落とした。(张协之, 沈起炜, 刘德重『中国历代人名大辞典』1999 上海古籍出版社 p.2153)

てしまった、これが移民の由来である。わが一族は明代の初めには三つの裕福な家があって、それぞれ一千、八百、六百頃（一頃は約6.7ha）あまり土地を所有し、三つの家をあわせて二千五百頃以上であった。いまのやや裕福な村一つは、全村でわずか五十頃の土地にすぎない（水郷を除く）。これに匹敵するのは、併せて五十カ村が持つ土地で、やや小さな県が管轄するものもわずかに五、六十カ村にすぎない。その当時のわが一族の土地は、あわせると今の一つの県全体より多い。これによって、その当時、河北省に人があまりいないのが、さらにはっきりとわかる。

われら一族は明末の前には、多くが農業に従事していて、勉学を重んじる家はすごく少なかった。明末ようやく経史を研究する人が出た、本県知事の孫文正公（承宗）と最も近い親戚であったので、経済についても多く議論した。第八代目の祖先文登公の時になって、まもなくもっぱら学者と交際するようになった。第九代目の祖先林玉公（国琳）は河北省新城県の王余祐（五公山人）、蠡県の李恕谷（恭）、博野県の顔习斋（元）の諸公と気心の知れた親密な間柄となり、ともに清軍に抵抗するために、軍事機構を作り上げた。ゆえに寧大東と二東の兄弟（二東という人は、劇の中の连环套に出てくる寧二敦と同じ人物）は多くの人と敵を防ぐ策を研究して、当時の雄県などの三県を取り戻した。そのあと清の勢力がすごく大きくなるのを見て、すぐ困難になるのを察知して退却した。当時、反清活動を取り仕切った者は、九代目の先祖であった。成功しなかったといえども、反清の気概はそのまま後代に伝わった。ゆえに光緒年間に到るまで、わが一族にはずっと「革命性」（革命の遺伝子）が伝わっている。

まず八代目の祖先からすぐ学問を重んじたが長い間、功名の人は出なかった。その時の功名とは、郷試に合格した挙人あるいは、殿試⁶に合格した進士を指して言っているのである。曾祖父の父親の治魯公（諱名は秉礼）になって、ようやく大経学者（甘肅省の人、その姓名は忘れた）に曾

6 殿試 皇帝が問題を出題し、皇帝の面前で受験生を試験する。（平田茂樹『科挙と官僚制』1997 山川出版社 p.10）

祖父の兄弟に学問を教えてもらうように頼んだ。この方はとりわけ三礼にたけていて、毎回昔の礼儀について講義した。たとえば、祝日に参内して皇帝に喜びをのべるとか、冠婚葬祭やふるさとでの出会いなどの礼儀である。必ず実地に講義し、すべての学生、使用人、童僕、労働者などはみな参加しなければならなかった。ある者はすすんで客の役をやり、ある者はすすんで主人の役をやって、みなおのおのその役についた。このような教え方は、古い礼儀をすごく簡単にはっきりさせることが多かった、この勉強のやり方はずっと父親に到るまで伝わり、いまも廃れず、私自身の学問する時になると、違いが多くなった。祖父のあと進士になったのは、阮文达公⁷ (元) の門下生であった父の伯父が挙人になった。父は武昌の张廉卿公⁸ (裕钊) について、十年ものあいだ科挙の教えを受けた学生で、のちに壬辰の時に最初の試験に合格して貢士になり、甲午の時の殿試でようやく進士⁹ になった、翁文恭公¹⁰ (同龢) と李文正公¹¹ (鴻藻) の門下生でもあつ

-
- 7 阮文达 (元) 1764-1849 清江苏仪征人 乾隆五十四年の進士 道光年間の仁閣大学士、役人として歴任中に學術振興と文化・教育を提唱。(张协之、沈起炜、刘德重『中国历代人名大辞典』1999 上海古籍出版社 p.754)
- 8 张廉卿 (裕钊) 1823-1894 清湖北武昌人 道光二十六年の挙人。内閣中書。(张协之、沈起炜、刘德重『中国历代人名大辞典』1999 上海古籍出版社 p.1299)
- 9 進士 進士の語は礼記の王制にみえている。隋の大業 (605-617) 中、初めて進士科を設けてから官吏の任用はみなこれによるようになった。唐代には科目を秀才・明経・進士・明法・明字・明算とし、この中では、明経・進士が重んぜられた。(鈴木春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年大修館書店 p.393)
- 10 翁文恭公 (同龢) 1830-1904 清江苏常熟人 1856年状元進士 同治帝、光緒帝両帝の教師。同治—光緒に軍机大臣、总理各国事务大臣、协办大学士、户部尚书を歴任。光緒帝の戊戌の新政に賛成したため免職になる。中日戦争の主戦派。(张协之、沈起炜、刘德重『中国历代人名大辞典』1999 上海古籍出版社 p.1970)
- 11 李文正公 (鴻藻) 1820-1897 清直隶省保定府高阳县人 1852年進士 1865年清朝同治—光緒に史部尚书、总理衙门大臣、军机大臣、协办大学士を歴任。中日戦争の主戦派。(张协之、沈起炜、刘德重『中国历代人名大辞典』1999 上海古籍出版社 p.1006)

た。ふたりの先生は、どちらも南方の人であったので、江蘇や浙江の風俗や学習に励む方法を多く吸収し、われわれ世代を教え指導するのに用いた。だから我々の知識は子供の頃、普通の子供と比べるとやや優れていた。

以上種々の状況はすべて私が受けた教育と関係があることがらである。だから嫌でなければ見てください、おおまかにいくらか述べているだけです。

2、子供時代

私は3歳になる前のまだ字が読めない時に、おばあさんたちから数唄儿を教わった。数唄というものは、民間に伝わる詩やことばに節や抑揚などをつけた歌、および、わらべ歌などであり、私ができるのは非常に多く、およそ数十である。父は私がすこぶる賢いと思ったが、おぼえたわらべ歌や民謡にはなんの価値もないので、わざわざ私のために、いくつか歌を作って声を出して言うように教えた。これは韻があるので、すらすら口にやすく、おぼえるのがすごく早かった。

兹写一两段如下：

“列列列列场啊（此乃吾乡小儿常说之语，乃转圈之义），打了麦子打高粱啊，高粱红满地，麦子上蒸笼，吃的饱饱的，穿的好好的，梳头洗脸早早的，吃饱了干什么，到书房上功课。”又有“推梨儿，让枣儿，爹娘夸我好宝儿”等等的这些话，不必多写了。

“列列列列场啊（これは我が故郷の子供たちがよく使う言葉で、回る意味である）、麦を収穫し、コーリャンを収穫したら、コーリャン畑が赤くなった、麦が蒸籠に入って、お腹がいっぱいになった、綺麗な服を着て、髪を梳かして顔を洗った、お腹いっぱいになったら何しようかな、学校についたら勉強しよう。”また、“梨を遠慮して、ナツメをあげた、両親は私を良い子だと褒めた。”

3歳から父より枕元で字をならい、あわせて詩を声に出して読むことも

教わった。それはただ口で読むだけで字はおぼえない。この時の世間の風潮は、読書人の家の子供のおおくは声をだして詩を読むことを学ぶのである、たとえば、“床前明月光”“三日入厨下”などの五言絶句¹²は短くておぼえやすいからである。熱心に功名をめざす家庭は子供に詩を読むのを教える、多くは：

“斗大黄金印，天高白玉堂，不读万卷书，安得见君王。”或者是：“学成文武艺，货与帝王家。”

“黄金で作った印が一斗になり、白玉で作った家屋が天にのぼる。本を一万冊（たくさん）読まないで王様には会えない。あるいは、文武両道を身に付けて、王様に仕えよう。”

などの文である。

我が家で小さな子供に詩を読むのを教えるのはわずか二とおりで、多くが：

“锄禾日当午，汗滴禾下土，谁识盘中餐，粒粒皆辛苦。”

“灼熱のお昼にもかかわらず、農民たちは畑で仕事をしている。お椀の中のひと粒ひと粒が彼らの苦勞のおかげであることを誰が知っているだろうか。”

“昨日入城市，归来泪满襟，遍身绮罗者，不是养蚕人。”

“昨日街に行つて、帰り道涙でハンカチが濡れた。全身をシルクの衣装をまとった人々の中には、一人も養蚕農家はいなかった。”

字をおぼえることについて言うなら、他の家とは違っていて、いまと学校の漢字も大きく違っている。いまの初級小学校で字をおぼえるのは、将来白話文を書く準備のためである。むかし字をおぼえるのは、あとで経書¹³を勉強し学問を求めるのに関係があるからで、私が書いてもらった四角の

12 五言絶句 絶句のうち一句の五字からなるものをいう。(近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.232)

13 経書 古の聖賢が述作した儒教の書をいう。四書・五経・十三経の類をいう。(近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.165)

字号¹⁴は最初すべて画数の少ないもの、または漢数字である。その後は経史の中の重要な文字やことばで、たとえば六書、九数、八音、六芸、十二律呂、四季、二十四節、および四維、八徳などの名詞や歴代の国号、年号、全国の省名、十三経¹⁵、二十四史¹⁶などを読み、書かないで四角の紙の字を見分ける。最初見分ける時は少しわかるだけで、何の意味もないようだがあとで経史を勉強する時に手間が省けるところがある。

4歳になってようやく塾に行く、むかしはじめていく塾の規則は“先洗浄手臉”である。この洗浄手臉の4つの文字について みなさんは価値がない話と思っているが、実際はそうではない。南方の水の多いところでは入浴することは、たいしたことではないが、北方の田舎の水源の少ないところではすべてを井戸水に頼っており、農民は毎日農繁期以外さらに毎日2、3回天びん棒で水を担いで、家の中に蓄えて使わなければならない。3回担いだ水はわずか30ガロン（1ガロン約4.5ℓ）で一切の飲食、洗濯及家畜の飲用としてすべてそれに頼り、家々ではつましく水を使う、だから入浴はたいへん大きな問題になる。知識人の家の子供は多くが毎朝顔を洗うが、農家の子供は毎日顔を洗うのはほんの少数である。入浴すること

-
- 14 字号 四角形の教育玩具の一種、3センチほどの方形の紙に文字を一字ずつ書き、子供に文字を教えるのに便利にしたもの。（北京师范大学中国大辞典编纂处『學文化字典』1952 商务印书馆 p.1918）
- 15 十三経 儒家の十三種の基本的な書物。周易・尚書・毛詩・周礼・儀礼・礼記・春秋左氏伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・孝経・爾雅・孟子をいう。（近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.330）
- 16 二十四史 清の乾隆（1736-1795）中に選定した正史二十四の総称。欽定二十四史と称する。1 史記、2 漢書、3 後漢書、4 三国志、5 晋書、6 宋書、7 南齊書、8 梁書、9 陳書、10 後魏書、11 北齊書、12 周書、13 隋書、14 南史、15 北史、16 旧唐書、17 新唐書、18 旧五代史、19 新五代史、20 宋史、21 遼史、22 金史、23 元史、24 明史 右のうち、16、18、と20以下を省いたものを十七史といい、それに20を加えたものを十八史という。また、右のうち16、18、24を省いたものを二十一史といい、二十一史に24を加えたものを二十二史、二十四史に新元史を加えたものを二十五史という。（近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年大修館書店 p.631）

に至っては話をすればさらに滑稽で笑える。

わが故郷の入浴はただ地面の大きな、くぼみの中です。南方では名を水塘という。その上、一年中で最も暑い“三伏”の時期で雨水の多いときでなければならない、そうでないとくぼみの中には水がない。しかし、入浴する者が不規則な人や、もし文人なら多くは敢えて洗わない。さらに子供なら、単に年長者が常に禁止する、おそらく溺死するのを恐れるからである。これに似た状況で水浴びに水を使うことがどうして問題にならないのか、ふつう顔を洗うのはちょうど降雨に出会って、自由に水を使うことができる以外、ふだん多くの人は、みなたらいの水を使う。このような洗い方で顔はもっときれいに洗うことができるのかな？ 大多数はみな首を洗わない。以前に子供が顔を洗うのを皮肉の民間に伝わる歌があり、言っているのは、この状況である。歌に曰く：

“一天到晚只贪玩，洗脸梳头不耐烦，脖比车轴还要黑，多年小辫擀成毡。”

“朝から晩まで遊ぶことしかしない、顔を洗うのも髪を梳くのも面倒くさがり、首は車の軸より黒く、長年結んだままの辮髪もフェルトになっちゃう。”

むかし知識人あるいは商人などはみな五日に一回辮髪を結び直し、十日で一回散髪するが、農民は不規則である、子供は二、三日に一度髪を整えるが、子供の頭がいろんな物とこすれることが多く、さらに乱れやすく、しばしば辮髪がほどけないのだ。以上のようなことはかなりふつうのことであるので、入学前の子供が、顔や手をきれいに洗うのは、特筆する価値があるようでもある。初めて学校に入るにはすべて行わなければならない儀礼がある。

各書齋の中にはすべて孔子さまの位牌である木牌が供えられるか、あるいは、肖像が描かれた紅い紙が壁に貼ってあり、先生が香をたき、自分から先に神牌に対して拱手の礼をして、ひざまづき頭を3度地につけ、立ち上がって再び拱手の礼をする。その後、学生も位牌にその通りに礼を行

い、もう一度、先生がこの礼を行って儀礼はようやく終わる。儀礼を終わってから、しばらく休憩し、すぐ“開読”をする。昔は授業とはいわず“開読”と言った。数年朗読したあと、先生はようやく解説をする、これを“開講”と言う、さらに数年朗読し、文章を作るのを学ぶ、これを“開筆”と言う。これが昔の読書人の3つの大きな段階であり、学校に入ると最初に三字経を朗読する、読書人の家の子供は字をおぼえるのがやや早く、先に字をおぼえてからまた本を読むのである、ふつう多くは先に三字経を読む、なぜなら、字を書いてくれる人がなく、その時その上印刷したものもなく、先生はさらに代わって書くことができないから、先に三字経を読んだ。だから先に三字経を読むことは一つに、それはまとめると経史を論じる意味がある。二つに、この本の字がやや大きくゆったりしていて、半頁毎はいつも六行で、毎行いつも六字であるので、子供にも簡単に見分けられる。もし四書五経なら、行の字はぎっしりで、はじめて学校に行く農家の子供には、すぐにはその一つの字をはっきりとは見分けられない。

だから、むかし一首の詩があり、描写はこのようである。曰く：

“一行一蕩尚分清，字字相离太欠松，试问书行何所似，一畦韭菜一畦葱。”

“文章の排列を理解したばかりなのに、文字間の距離が近すぎる。文章の排列は何に似ているかというと、一畦のニラと一畦のネギのようだ。”

言い過ぎのようでもあるが、確かにこの状況もある。私たちは、三字経¹⁷を読み終わったら、すぐ唐詩、絶句を朗読し、篆字をおぼえ、説文を読んだ、しかしたいへん浅く、ただそれは説文建首字読および文字蒙求の類に

17 三字経 むかし村塾で用いた童蒙のための課本で、元以後、盛行した。毎句三字からなり、隔句に押韻し、数句ごとに換韻している。一般的な事物や、通俗的な歴史事実などを包羅していて、子供や初学者に文字を覚えさせたり、初歩的な思想教育を施したりするのを主目的とした。(近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.273)

すぎない、あとでただちに四書、詩経、書経、易経、礼記、孝経、周礼、左伝を読み、17歳になって、ようやく爾雅、公羊伝、穀梁伝を読み終わった。

この十数年の間に、子、史、古文文選、古唐詩を学ぶ以外に天文(三垣二十八宿およびいろいろな恒星を知ったにすぎない)と一緒に学んだ。算学はまず珠算を学び、あとで計算(勞乃宣が著わした古筹算考)を学び、最後に筆算を学んだ、そのときに筆算を学ぶのと現在と二とおりあり、現在は横書きであるが、その時はまだ縦に書かなければならなかった。たとえば足し算は縦に二行あるいは多くの行(加えるべき数)を書き、それからまた最も右側に直線を描き、加えて得られた数を真つすぐに右側に書く。この書き方は今見てもすごく見栄えがよくない。その時はまだ横書きは許されていないから、もし横書きすれば、それこそ大逆非道の罪を負わされた。光緒年間の中頃には秀才の試験の時にも、たまに数学があった。かりにも横書きするなら必ず叱責を受けるに違いない。庚子(1900)の頃には厳しくないものも多くなった。地理はただ『瀛寰志略』¹⁸や『海国図志』¹⁹などの書物だけであり、この外にはまだすばらしいものはない。八股文²⁰や小楷などを作るにいたっては、時間のむだ使いとは言わないが、このあと、使い道もすぐほんとうに少なくなった。この10年間で私は三度、満足する事があった、それはすべて対句を合わせることである。その時の小学生の対句とは、1, 2年本を朗読したあとの最も初歩的な授業である。

18 瀛寰志略 徐继畲(1795-1873)が道光十八年から福建巡撫として福建省と広東省の沿海地区の仕事に就き、そこで見聞きした1840年代の欧米諸国の風土と状況を紹介した。(清徐继畲『瀛寰志略』2001 上海书店出版社 p.1)

19 海国図志 魏源(1794-1857) 西洋のすぐれた技術を学び、それでもって外国を制する考えを提唱した。(魏源『海国図志』1999 中州古籍出版社 p.1)

20 八股文 明清時代科挙の経義の試験答案を書くのにもちいられた文体、論文の構成、句法、字数などに厳しい規定が設けられていた。(平田茂樹『科挙と官僚』1997 山川出版社 p.21)

北方の小料理屋や飯屋はコーリャン酒を売る、すべて二兩を一壺とする。北平もこの決まりであり、いつも二兩を単位とする。たとえば一人二人食事をして酒を飲みたくて四兩ほしいと思う、しかしいつも、みな四兩とは言わず、いつも二壺あるいは俩二兩という、またご飯を食べ終わった後、ある人がいくら飲んだのと問うと必ず俩二兩飲んだと答える、これはしきたりである。あるとき、わが家に数名の来客があった、それぞれ挙人²¹、進士²²、拔貢²³、廩生²⁴などである、みんなで雑談した。私の母親方のおじさんが、ひとつの対句を出した、みなさん答えてください。曰く俩二兩、さて三字の意味は、すべて二とみなします。みんなは二時間考えたが対句がない、私は突然妙案を思いついた、対句がいえる、みんなは、なにをもって対句にするのかとたずねた。私は“一个么”と、言う。さて一个はもとより一である、そして一十百千万の字も一である。その時、席に着いている人の中に、个の字は一とみなすことができないと言う者がおり、それは閻瑞庭先生という人で進士であった、かれは康熙字典の注の中に个は数である、すなわち数字として解釈することができるなら当然一とみなすと言った。私は开宝摇攤の人はいつも开了一个么と言った。そこでおいに褒められた。その時私は、やっと七、八歳であり、そのうえに小制錢五百錢を与えられて褒められたのであった。五百錢はわずかに今の

-
- 21 挙人 地方各省において行う郷試の合格者。(宮崎市定『科挙史』1987 平凡社 p.53)
- 22 進士 清朝時代の科挙は三段の試験あり、各省の生員をその首府に集めて行うが第一段にて郷試といい、郷士に合格すれば挙人なる資格を獲得する。次に全国の挙人を北京に集めて第二段の試験、会試を行う。会試に合格せる挙人(また貢士)はさらに引続き天子自ら行う第三段の試験殿試に赴き、殿試に及第して始めて進士なる称号を賜り高等文官たる資格を取得する。(宮崎市定『科挙史』1987 平凡社 p.126)
- 23 拔貢 県試、府試、院試に合格した生員中の非常なる人材を科挙と別途に登用するのを拔貢という。(宮崎市定『科挙史』1987 平凡社 p.119)
- 24 廩生 廩膳生ともいう、政府より若干の学資を給せられ、また童試の際に、受験者たる童生の保証人となり幾何の謝礼を受くる便宜あり、出貢に際しても優先権を有する者である。(宮崎市定『科挙史』1987 平凡社 p.118)

銀貨二角あまりにすぎず、数字は大きくはないが、もしそのとき点心を買うとしたら、たとえば焼餅や油条などはたつぷりと数か月たべられた。どうして自慢せずにいられようか。

またあるとき、父親が『文選』について説明した、文の中に“佳禾垂穎 顾本”“よい稲穂が頭を下げるのは、根本を忘れないからである”、という句があり、曰く、すべての事はもとを忘れてはいけない、よい穀物でさえこのようである、ましてや人であるのなら。二日間で私の読んだ詩の中にちょうど“野兎眼岸有闲意，老树着花无丑枝”“野生の鴨が岸辺で眠り、いかにも悠々自適、長寿の木には鮮やかな花が咲いていて、醜い花は一つもない”の二つの句があり、私もとっさにひらめき、佳本垂穎顾本は、老树着花无丑枝とピッタリではないかと尋ねた。父親はまたすぐ褒め、一つ二つの字はあまりピッタリではないけれど、まだ良い対聯であるといった。その時私はようやく十一歳になっていた、そのときも百銭の褒美をもらい褒められた。およそ今の銀貨五分(半角)にもならないが、でもこの時の子供が手にしたのは、はなはだ大きな数字とみなされるもので、新年の祝いを除いてこのようなことはありえない。

またあるとき、昆弋班の義侠記武松の兄嫁殺しを観て戻ってから父親が言ったのは、この劇は当然水滸伝をまとめたものであるが水滸伝のこの話の文字の中に大変良い言い回しが三句ある。それは、

有泪有声谓之哭，有泪无声谓之泣，有声无泪谓之号。

涙あり声あるのを哭といい、涙あり声なきを泣くといい、声あり涙なきを号という。

当時私は二日前に康熙字典の嘔の字を調べたことがあり、下の注に三句あり、この状況とだいたい同じであった、曰く、有物有声谓之呕，有物无声谓之吐，有声无物谓之嘔。物あり声あるのを嘔といい、物あり声なきを吐といい、声なき物なきを嘔という。私がこの三句は上の句とちょうど対になっていると言ったら父親はさらにすぐ褒めた。この時私はすでに十二歳であったが褒美のお金を与えて褒めるのではなく、一枚の白いハンカ

ちすなわち、いまの白い西洋ハンカチを与えられ褒められた。今は人々が皆持っているのも当然どんな新しい物でもないのだが、その当時はすこぶる斬新であった。なぜなら当時田舎にはまだこの物はなく、北方の北平にだけはあった。その上これを使う者の多くが流行の先端の人であり、北平でこの物を売るのは交民巷にあった祈羅弗洋行だけである。だから新鮮であるばかりか、貴重であった、そのうえ田舎では手絹というこの名前もまだなく、すべて絹子というだけで男子の使う物は、名を手巾といいすべて木綿の布であった。女子の使う物を絹子といい、多くは西洋ちりめんまたは薄い絹織物で作られ、いろいろな色がすべてあり、その上に刺しゅうがされていた。それこそ白い物はないのである。女子の使う絹子について話すとさらに特別で、ふだんは使う人はいない、ただ新年の祝いは冠婚葬祭の時に使うだけで、新婦はかならず使わなければならない、自分のものがないなら借りなければならず、やや貧しい者はわずかに一つ持っているだけで、手で握って使い、多くの者は三つ使う、二つ目は普段首に巻くのを使い、三つめは袖口の上で結ぶ。ふだん道を歩くとき、行ったり来たりみせびらかし、女らしくしとやかで美しい。いまはこの状況はなくなってしまっている。当時奥様方は、私が一枚の絹子を手に入れたと聞いて、会う人ごとがみな私に、話に聞いたところではあなたは外国の絹子を手に入れたのですかとたずね、ちょっと持たせて見せてと言ひ、見た後である人はほんとうに真白できれいですねと言ひ、ある人は白いのはほんとうに縁起が悪く、あえて使わないものだという。数日したら私のそのハンカチはみんなに見せて汚されてしまった。

一度、偶然本棚を調べたら“草字彙”²⁵という本をみつけた、それは初版本で、たいへん精緻で美しく、私はいつも机の上に置いて手本にして練

25 草字彙 清の石梁の撰。漢の章帝から清の龔有融までの九十七人の草書を集めて、部首によって分類配列したもの。(近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.460)

習していた。父親はこれを見て、あなたは、これを学ぶ必要はない、なぜなら科挙の試験で使われないばかりか、将来公務でも使われない、これを書く者は人が楽しむのに提供するだけである。しかしながら、将来楷書を書く基礎ができたあとさらにこれを書くのはまだよい、子供時代は決して必要ないさらに、草書に多く頼るのはできない、とりわけ明末にたいへん草書が流行した。しかし多くの人はすべて思い通りにこれを行ったが範とするに足りなかった、と言った。李笠翁²⁶は鳳求凤传奇の中の一つの歌曲で、すぐにこれをばかにした。歌に曰く“学びも道教の僧侶の魔よけの札の形で、一筆ふるう筆先は忙しくいつも草書は簡単でいいかげんなのを覆い隠す、たとえ書き間違いでも帳簿を調べるのはむづかしい。ハエの頭で尾は鳳凰、ゆえに奇妙な装い、蛇の頭で亀の体、よいものは、すぐ拙いものをかくす。これは書道家の秘訣で今まで尊んでいる。”これらの話は笑い話であるけれど、大部分はこれも実情であり、これによって知ることができるのは、もしこれを学びたいのなら、さらにとびつきり暇な時間を費やさねばならない、だから私はこれを学び続けていない。

最も面白いのは村塾での勉強のときである。十数人の子供は皆七八歳から十二三歳までで、一部屋の中で勉強する。みな人の腕に手を添えて支え、声を張り上げ、一日中大声で叫ぶ。以前覚えた随園詩話²⁷に載っている一首の詩に曰く：

“漆黑茅柴屋半间，猪窝牛圈浴锅连，牧童八九纵横坐，天地玄黄喊一年。”

26 李笠翁 明末清初浙江人 性たる任侠にして好で四方に遊び、著わす所頗る多く小説、伝奇、詩文、詩、その他雑筆甚だ少なからず。(藤田豊八、大町芳衛、笹川種郎、白川次郎、田岡三代治『支那文學大綱』巻3 李笠翁 明治三十年 大日本図書 p.5)

27 随園詩話 清の袁枚(随園)の撰。詩に関する諸説を筆に随って記したもの。多くは同時の人のことであるが、ままたま古人に言及している。(近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.414)

“豚小屋、牛小屋、釜焚き場が繋がっている真っ暗で小さな茅葺屋根の部屋で十人ぐらいの子供が縦横に並んで座って、千字文を一年中唱えている。”

袁子はようやくさらに批評した、この詩の末の句はすごくおもしろい。北方の田舎の小さな教室の十中八九はこのようである。私の入った村塾はこれと比べて良いところは少しあるけれど、良くないところが多い、それはどうしてこの様なのか、その原因もある。なぜなら、この幼くて無知な童蒙小学（今の名を初級小学という）は支払うお金はすごく少ない、学生ごとに毎年わずか小制銭五百文で、いまの銀貨二角五分と同じ値で、十人の学生を合わせて全部で五吊銭、最も多い者でも十吊銭にもならず、約五元と同じ値である、この幾らかのお金で村外の先生にお願いする、これは来て頂くのにすごく難しいことである。ただこの村の人をお願いするのであるが、この人には勉強を教える以外にさらに多くのほかの仕事があり、すべて処理しなければならない。例をあげると下のようである。

- 一、その人は自分の家の中の生活を切り盛りしなければならない（家事の切り盛りを过日子という）。
- 二、その人は農作物の世話をしなければならない、毎日いつも農村の中を見にいかなければならず、耕したり植えついたり、鋤で草をとるときにはさらに、離れられない。
- 三、その人は字が読めるので、村の中に冠婚葬祭があるなら、いつも帳簿などを付ける手伝いをしなければならない。
- 四、およそ、先生の多くは人に敬われるので村の中に小さな争い事や、いさかいなどがあればいつもその人が行って仲裁しなければならない。
- 五、麦が実った秋の収穫のとき田舎では、さらに学校を休みにしなければならない。
- 六、田舎はいつも、五日に一度は集まり、多くは市に行かなければならない、南方では趁墟という。
- 七、年越しの最も少ない休暇は一ヵ月である。

以上これらの状況をみてください、毎年年休が一ヵ月および麦の収穫時期の最も少ない一ヵ月、これ以外の残りの余った300日の中の180日はいつも教室にいない、どうやったら学童によい指導ができるのかな？ その人は誰かに会いに出かけるときにはいつも学生に指示する、どこからどこまで声を上げて読み、よく読んだあと先生が戻ったらさらに本を暗唱する。当然一部の子供にはそんなにきちんと読まないものいる、だから先生は出かけるときしばしば、隣近所をお願いし、かわりにすべての子供が、はたしてみんな読んでいるかいがないか、ひそかに聞く。学生たちはこの状況を分かっているので、さらに力を込めて読まなければならない、隣近所に聞き取りやすいようにいつも大声で叫ぶので喉がかれる。先生がすぐ遅く戻ると、休むひまなく本を暗唱し勉強が終わる。これで言えるのは、長時間大声で叫び、無駄に待つ。一年間で千字文²⁸を読み終わらない学生はたいへん多い、その天地玄黄を大声で叫ばなくて、どうして一年いられるのか？ 以上言ったのはいろいろな学校のことであるが、最も低級で相当腐敗していたとも言える。

さらにこの様なものと比べて、やや良いところがあるものもあり、その中に四書を学んでいるものもあった。以前に一つの詩があり、それはこれらの学塾を描写したものである。曰く：

“いくどか鳥やカラスが泣き叫ぶ夜の風、児童はそろって喉をひけらかす、赵钱孙李周吴郑 天地玄黄宇宙洪 三字文をおおまかに検討し終え、百家姓を終えた神童の中に、とりわけ抜きんでる者がいる、一日に三行、大学と中庸を学ぶ。”

この歌を皆さんは当然分かっておられるが、当時の細かな状況はおそらく多くの人にははっきりとは解らない。いわゆる、一日三行读大中のなかの大中の二文字は大学と中庸を指す。いわゆる、三行というものは(行の音

28 千字文 梁の周興嗣の撰。四言古詩二百五十句、「天地玄黄、宇宙洪荒」以下一千字から成っているのでその名がある。(近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.447)

は杭)、昔のこどもの読むのは四書で、だいたいいつも一行は十七文字で、並みの子供は毎回新しい本に進む、いつもは三行をきまりとして、三行を暗唱して読んだあと、ふたたび三行を学び、暗唱して読んだあとさらに三行を学ぶ。最も賢い子供は毎日七八十行を読むことができるが、しかしこの様な者はすごく少ない、おおよそ毎日四十行を読むことができる者は、たいへん賢いとみなされる。だから昔の高齢で徳の高い人たちは、どこそこの子供は賢いとか、はたまたそうではないとかを議論する。すべて言っているのは、毎日どれだけの行の本を読むことができるか、問う人もこの様な聞き方である。あなたの子供は本をどれだけの行を読むことができるのかな？ これは通例である。このほかにことばつかいで子供の賢さの程度を形容できるものはない。最もにぶい者は一日三行を熟練できない、だから一日三行読大中と言うのである。私はこの私塾に二年とどまって、ひどい目に遭ったとも、おもしろかったとも、言うことができる。七歳になるまでは家塾で勉強した。勉強以外に対聯について学び、詩を作るのも学んだ。詩を作るのは最初わずか四句にすぎず、いま詩を作ることができる人は大変多いが、この種類の詩を作ることができる者は、おそらく多くはない、この名を試帖詩という。特別な法と規則がある、かならず公的な韻を踏まなければならない、かならず題字を選ばなければならない。たとえば好き勝手に例を挙げると清朝の人のたいへん有名な詩がある。題目は、“賦得大田多稼得多字” 詩を作る時に偶然“大田多稼”の題目を得て、そのうちの“多”の字を授かった。詩の題はかならずこの様な書き方でなければならない、題の上に冠する“賦得”の二字の意味は賦詩が偶然に得たこの題ということである。得多字とは多字を韻としているのである。このように多字はまさしく公的な韻である。この字を押さええないのはだめで、この字を使うばかりでなくそのうえに前の二つの韻をすぐ使わなければならない、仮にもしそれを使わないなら、名詞はすぐ公的な韻を踏んでいないと言われる。たとえあなたの文章や詩作がよいところが多くても秀才に

進むことはできない。郷試²⁹に合格した者や進士はさらにこの様である。題字を選ぶのもたいへん重要であり前の四句の中で必ず題字を選び出さなければならない、あるときに一字選ぶのが少ないか、またはだめになったことがないなら、ただしすべて欠点とみなされる。そのうえ必ず点を付けないなら、連用をすることができない。やむを得ず二字の連用まではできるが、もし三字の連点ならすぐに題を侮辱したとみなされる。ここにもとの詩と前の四句を書き出す、諸君はひと目みてはつきりするであろう。

大地如云涌，秋高欲納禾，公田原上上，我稼益多多。

稲穂の畑が雲のように動き、秋となり稲穂の収穫時期が来た。田んぼの質が上等だから、わが収穫もいっぱいである。

多の字は公的な韻で、題目の大田と多稼の四字はすべて前の四句の中にある、すべて試帖詩を作る者はみなこの様でなければならない。

さらにもう一歩進んで、文章を作るのはすなわち八股文を作ることであり、これの正式でない名を開筆という、すべてこれを作る者は大学生とみなされる。また八股文を作る前に当然、先に八股文を読まなければならない。はじめに読む八股文はいつも山西の路潤生先生たちの編纂の時芸引や時芸階などの文集である。むかし八股文に関わるものをすべて作時芸と呼んだ。間乎も小題折子を読むこの類の作品集である。むかし知識人はすべて八股文の文字を話す、すなわち経義を十分に表現したが、実際にはこの文やことばはそれに頼るのとはできないといえることができる。もし明朝の天崇文集（すなわち天啓崇禎年間の文章またの名は啓禎）によれば南方の金正希の文章や北方の路潤生の時芸核などの作品集はすべてさらにいえるのは経義と関係があるということであり、それこそ清朝の郷・会試の文章もいえることができるのは、あるいくつかの経義の中にあるということである。ここに言うのは良いものであって、もし普通の墨巻の中なら経義を見

29 郷試 明清時代の科挙試の最初の段階。郷試に合格すると挙人の称号を与えられ、役法・刑法上の優免特権が与えられた。(平田茂樹『科挙と官僚制』1997 山川出版社 p.1)

つけるのはむづかしい。小考の八股文に至っては（むかし秀才の試験にかかわるのを作考小考と呼んだ）ほんとうに言うことができるのは経義とお互いにまったくかわりがない、いうなれば反対に郷・会試の文章はやはり、さらにどちらかというと容易に作れる。なぜなら郷・会試³⁰の題目は多くても一章で、少ないなら一節あるいは数句で、最も少ないの一句のものもある。題に照らして十分に表現できるのは経史の中の意味ばかりでなく、当時の国政・社会の中の状況を中に収めることができ、すべて引用して証拠として使うことができる。題を借りて十分に表現して、書籍をもって政治の得失をただが、小考の題目に至ってはそうではない。すべての句の題は多くみられない、あるときはわずか一字だけである。最も不思議なのは截搭題である。

なにを截搭題と呼ぶのか？ それこそ上の一節の最後の句を上下に切り離し頭の句をつなぎ合わせる、たとえば言うなら、不亦乐乎有曰其为人也孝弟、これこそまさしく截搭題である。その中でさらに、有情截搭と无情截搭に分ける。上下の二つの句は意味に少し関連があるならすぐに有情截搭とみなし、すこしお互いにつながっている意味もないなら、すぐ作无情截搭と呼ばれる。最も一般的なものは截下題とされ、それこそ文書の一句を題として出し、重要な意味は下によって決まる。たとえば、題として出された学而时习之の一句はもともとの意味は下の不亦说乎の一句にあり、この題の作文方法は学而时习之とすることができるだけで、下の说(悦)の字について言うことはできない。しかし文章の句の意味は下の意味を含まないことはゆるされない。仮に下の句の意味を含まないのなら、すぐに題の本当の意味を作られていないとみなす。仮に上下の说的字を使ってまさしく抜け落ちているなら、これはすごく大きな欠陥であり、絶対秀才に進むことはできないものである。この題文の作り方を下に一つの例として挙げる。言い伝えでは、乾隆帝が一人の役人を引見し、乾隆帝は

30 会試 各省の挙人（郷試の及第者）を京師に集めて行う試験。（近藤春雄『中国学芸大事典』昭和五十三年 大修館書店 p.67）

彼に文章を作ることができるか否かを問うた？ 彼は作ったことがあると答えた。乾隆帝はここに一つの題がある、あなたは破題を作ることができる、題は周有八士到季随とすると言った。その役人がちょうど思索しているところ、乾隆帝が、朕があなたに代わって一句作った、記周士而得其七と云った、その役人は答えて曰く、みな兄である。乾隆はおおいに喜んだ。さてこのようにすなわち注意するのは第八番目の人であると、これに照らして言う。さらにあるとき、われらが学塾の中での作文で先生が“虽小道”という題を出した、題はわずか三字であるが重要な意味が下にあり、それは“必有可观者焉”の一句でわれわれ学生はみなうまく作れなかった。先生が作ってくれた一つの破(八股文の先頭の二句を曰く破、続く三五句を曰く承、また曰く破題承題、)曰く、道而小焉、小亦道焉也。この小亦道也の四字の中にまさしく可观者焉の意味が内にある。されど可观者焉の四字はすべてはっきりとは書かれていない。これに照らしていうと、仮に明らかにこの四つの字を使うとすれば、まさしく抜け落ちている。小考の時この題の文を作りこの破題があるのなら、疑いなく秀才と認められる。なぜなら、小考の答案用紙を見るとただ前の二行が見えただけですぐ合格を手に入れる希望をもつ、そうでないなら一つ破題を見て気に入らず、すぐ捨て去って再び下を見ない。以上いっているのはすべて教室の中の状況である、一般の規則はすべて五日間で一度文章を作る、この名を窗課と言う。なぜなら书房の二字はときには窗下ともいう、ゆえにことわざに二句あり曰く“窗下莫言命、场中莫论史。”教室では運命と言わない(努力だけ考える)、試験場では歴史を論じない。このことはあとでおおまかに話し、以下はすなわち科挙試験の状況について話す。